

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 125号

2020年 9月

青山高原のソウシチョウ

伊賀・津境を走る青山高原道路。その三角点入口にある駐車場西側にアセビ林が広がっています。駐車場のガードレールの切れ目から法面を少し下ると東海自然歩道があり、細い谷川を渡って奥山愛宕神社へ続いています。この小さな流れへ小鳥たちが水浴にやってきます。ソウシチョウの鳴声は遠くからもよく聞こえますが、姿は木々の枝葉でチラチラとしか見られません。今年8月中旬に群が餌を探して林冠を動きまわり、帯状に移動していく場面に遭遇しました。特定外来生物に指定されているソウシチョウの由来は本誌120号(清水2019)にも紹介されていますが、三重県のソウシチョウの分布や繁殖の状況は調査されていないようです。

私が青山高原で初めてソウシチョウの鳴声を聞いたのは2006年のことで、美里町桂畑へ下る瀬戸林道の降り口でした。この場所へは翌年の春から何度も通い、2012年4月19日に移動の途中と思われる数羽と出会い、近くで繁殖しているのだろうと推測しました。この場所から林道を少し上がって伊賀市上阿波へ下る道路沿いにもソウシチョウの鳴声がよく聞かれるササ藪がありました。しかし、これらのフィールドはシカの食害で背丈の低いササになってしまい、ソウシチョウの鳴声は聞かれなくなり現在に至っています。

ところが、上述のアセビ林には毎年群がやってくるので、ソウシチョウは青山高原のどこかで繁殖しているとみられます。鹿の食害を受けていない場所を見つけているのか、ササ藪に代わる場所で繁殖しているのか判りません。もともと標高1000m以上で繁殖する鳥だそうですが、青山高原のように標高800m以下の山地でも繁殖しています。7月～9月に青山高原道路の周辺をハイクすると、ソウシチョウの鳴声や姿を見かけるかもしれません(写真)。



写真 茂みで餌を探すソウシチョウ。伊賀市勝地 青山高原, 2020年8月12日

(今堀聖史：津市久居小野辺町1454-30)

松阪市四郷池湿地管理の状況(4) ～カワラナデシコを移植してみた～

谷口 雅 仁

四郷池から500m程離れた小田池の堤に自生しているカワラナデシコをこの湿地に移植してみました。これは、この湿地の管理というよりも、生育数が減少してきている小田池のカワラナデシコを避難させることが目的でした(図1)。

小田池のカワラナデシコは、私が子供の頃から自生しているのを知っていましたので、少なくとも50年以上前からここに自生しているものです。個体数は20株から30株程度といったところでしょうか。初夏の頃に池の堤を歩くとピンク色のきれいな花が幾つも咲いているのを見ることができました。しかし、私の知る限りカワラナデシコが自生しているのは、この辺りではここだけでしたので、ひょっとすると過去に鑑賞用の目的で植えられたものなのかもわかりません。

移植先の四郷池の湿地は、鬼ヶ窪池の下流側となりますが、元々この鬼ヶ窪(鬼久保)には小阿坂町が水利権を持つ小さなため池があったようで、その地名からしても自然の湿地帯がこの場所を含めて広がっていたのではないのでしょうか。そこに下流域の美濃田町の要望により大規模な堤防が造成され、現在の鬼ヶ窪池が出来上がったのです。そのため、今でも鬼ヶ窪池の底樋を抜く水利権(造成前の池の水利権に相当)は小阿坂町が有しています。それを取り決めた協定書の日付が明治15年となっていますので、その造成工事自体は今から140年程前だったものと思われます。

カワラナデシコの移植は、2017年の春に4株を移植したところ4株とも毎年花を咲かせて徐々に株が大きくなってきています(写真1)。花の後にはたくさんの実を付け大量の種をばらまいているようですが、不思議と新しい株が育っているようすは今のところありません。

この誌面をお借りして、カワラナデシコを移植したことを記録に残しておきたいと思います。



写真1 移植したカワラナデシコの花



図1 カワラナデシコ移植元、移植先の地図(国土地理院地形図を改変)

(たにぐち まさひと：松阪市小阿坂町 4038-2)

コハクオナジマイマイの分布拡大に関する仮説

中 優

本誌121号で黄色のカタツムリ（コハクオナジマイマイ）を指名手配したところ、ほどなく大杉谷自然学校（大台町）の大西かおりさんから情報を頂いたので現地へお邪魔し、本種であることを確認した（下③）。さらに、三重県4例目となる南伊勢町での確認記録とともに、この確認地の状況から得られた本種の分布拡大に関する仮説を提示する。

一部再掲載になるが過去（中2019）の確認情報と今回の情報を整理して以下に示す。

- ① 2003/7/17松阪市飯高町宮本（2006/9/17と2011/6/18にも同所で確認）
- ② 2019/7/11松阪市下蛸路町
- ③ 2019/9/18大台町久豆 大杉谷自然学校
- ④ 2020/7/04南伊勢町内瀬（写真1，2）

2例目は松阪市下蛸路町での確認であるが、その時から気になっていた状況が4例目の南伊勢町で同じように展開されており（写真3）、ここに提示する仮説を思いついた。その「気になる状況」というのは、現在、三重県各地で行われている太陽光発電施設の設置である。

松阪市下蛸路町へはお墓参りで20年以上通っていたが、同地でコハクオナジマイマイをみかけたのは昨年が初めてであり、隣には太陽光発電施設が設置されていることに気づいた。ただ、同施設の設置が昨年なのかあるいはそれ以前の設置なのかについては記憶にない。また、お墓まわりの度にコハクオナジマイマイを探していたわけでもないので、同施設が設置される前から現地に生息していた可能性も考えられ、今回の仮説に明確な根拠があるわけではない。さらに、設置工事を行った業者に聞き取りを行っていないため、工事内容に関しての情報も全くない。

その上で、コハクオナジマイマイの分布拡大には太陽光発電施設の設置が関わっているといたい。もちろん発電パネルなどの機器類が関与しているはずはなく、設置の際に使用された整地用の埋め戻し材が関与していると考えている。4例目となる内瀬の現地には写真3に示したように、おそらくアスファルト舗装由来の埋め戻し材が使われており、現地には元々なかった物である。場所の特定はできないが、仮置きされていた埋め戻し材の中にコハクオナジマイマイが産卵し、運ばれた先の内瀬で孵化したと考えている。

この埋め戻し材による分布拡大の仮説を支持する事例が、植物では大杉谷自然学校近くの林道でも確認されており、それは大西かおりさんから分布の情報をいただいた「セリバヒエンソウ」である。植村ほか（2015；増補改訂 日本帰化植物写真図鑑 第2巻，全国農村教育協会）によると、同種は明治時代に中国から渡来し東京周辺や静岡県で分布している。ただ、これまで三重県での分布は確認されていなかった。同種を現地で確認した市川正人氏（私信）によると新しく埋め立てられ



写真1 コハクオナジマイマイ



写真2 コハクオナジマイマイの集団



写真3 太陽光発電施設（左後方の草や壁で多数確認）とアスファルト舗装の細片が混じる埋め戻し材

た平地でみられたとのことで、埋め戻し材による新たな種の分布の可能性を示唆している。

また、ラン等の観賞植物を展示している植物園や植木等を扱っているホームセンターなどで、これまで見たことがなかったナメクジやベッコウマイマイが発見されるといった報告が少なくないことも、物流による分布拡大を裏付けているのではないかと考えている。

本仮説に対するご意見や情報を期待している。

最後に、大西さんと採集された宮川雅彦さんにはこの場をお借りしお礼申し上げます。

(なか まさる：伊勢市小俣町本町1284)

今さら聞けない混同されやすい用語

河 北 均

論文報文を書く際に分かっていても、ついうっかり使ってしまったたり、人によっては漠然としか理解していなかったりする自然科学の用語が散見されます。

1. 種と種類

恥ずかしながら、私はかつて種と種類の区別がついていませんでした。種と種類の使い方については状況に応じてなんとなく漠然と使っていました。昆虫のある専門誌で種と種類は違うということを高名な昆虫学者（記憶違いかもしれないが、白水 隆先生だった気がする）が書いておられ、それで種と種類は違うのだということ知りました。

今さらですが、種 (species) と種類 (kind) の違いについて述べておきます。

種とは生物分類上の単位です。リンネの分類が日本に導入された際、speciesという概念を種と翻訳して分類学に位置付けたと思われます。種類とはもっとおおざっぱな概念です。種のようにはっきりと定義されているわけではありません。

具体的に説明します。ある地域にコムラサキとクロコムラサキが生息していたとします。種としては1種ですが、種類としては2種類としても良いでしょう。本州にはオオセンチコガネ、ルリセンチコガネ、ミドリセンチコガネの3種類が生息していますが、種としては1種です。生物学とは関係なく、一般的な例を挙げると、ボラ（イナ、トドなど）やスズキ（セイゴ、マダカなど）のような出世魚は分類学的には1種であるが、大きさによって複数の種類になります。要は種類とは広義であり、種は狭義であるということです。

一般的には種類という用語が使われることが多いようですが、論文報文の場合、厳密に定義する必要があり、種類ではなく種を使用すべきでしょう。

2. レッドリストにおける指定と選定

レッドリストにおける指定と選定について環境省は次のように定義しています。

『レッドリスト及びレッドデータブックにおいては、「絶滅のおそれのある種」は「掲載」または「選定」されるものであり、法的規制を伴うような「指定」という言葉は使いません。』簡潔明瞭な説明です。「ベッコウトンボは国内希少野生動植物種に指定されている」「ベッコウトンボはレッドリスト絶滅危惧IA類に選定されている」「ベッコウトンボはレッドデータブックに掲載されている」というふうに厳密な表記にするべきなのではないでしょうか。

私は指定と選定を区分する環境省の厳密な見解に従うよう心がけていますが、広義には指定としても差支えないような気がしないでもありません。

3. 生態系を破壊する

自然環境保護活動家が好んで使う言葉です。彼・彼女らがいう意味は言葉足らずで、生態系そのものは破壊されません。既存の生態系が破壊され、新しい生態系に移行することを短絡的に言っただけです。ですから、正確には「現在の生態系が破壊される」と言わなければ意味がとおりません。

以上、思いつくままに3点ほど挙げましたが、今さら恥ずかしくて人に聞けず、漠然と使っている用語はほかにもあると思われます。この続編、誰か書いてください。

(かわきた ひとし：伊勢市岡本1丁目17-18)

津市久居一色町でフェモラータオオモモフトハムシを確認

上 田 利 彦

令和2年は、年明けから新型コロナウイルス感染症が拡大し続け、様々な活動も自粛ムードとなつて、それがかえって自宅周辺の自然環境を見つめなおす機会になっています。

さて、自然誌だより124号で谷口会員の報告にもあったフェモラータオオモモフトハムシ (*Sagra femorata*) ですが、7月3日早朝、津市久居一色町の長野川右岸河岸段丘で、クズの葉の上に2個体を確認しました(写真1)。夕方5時半過ぎに12個体を、さらに翌日4日に9個体を確認しました。その後7月17日2個体、8月3日に1個体を確認しました。同種については、10年ほど前から松阪市発祥で拡大が懸念されている外来種と聞いてからずっと気にしてきましたが、自宅周辺ではこれまで未確認でした。派手な個体なのでいけば見落とすことがなかったと思います。

三重昆虫談話会会員の乙部 宏氏に伺うと、「概ね6月下旬から発生し、小雨時や夕方になると葉上に出てくる個体が多い。日中は葉陰になる蔓に噛み傷をつけ吸汁している。またゴールに集まり交尾・産卵し7月中下旬になると拡散する傾向のようである。」と教えていただきました。確かに、今回の確認も時間帯は朝夕で、小雨が降っている状況でした。7月上旬に集結、7月下旬から8月上旬に拡散といった様子が見受けられました。今年の発生個体から来年のシーズンにはどの程度拡散するのか興味あるところです。確認場所はもともとあったササ、カラムシとその上に繁茂したクズのほか、ガガイモ、ヤブガラシ、ヘクソカズラ、ヤマノイモ、オニドコロ、ニガガシユウ、カラスワリ、ノイバラ、ヨモギなどが混じる植生となっています。

ここではシロコブゾウムシ (*Episomus turritus*)、オジロアシナガゾウムシ (*Sternuchopsis trifidus*)、コフキゾウムシ (*Eugnathus distinctus*)、トガリシロオビサビカミキリ (*Pterolophia caudata*)、マルカメムシ (*Megacopta punctatissimum*)、ホソヘリカメムシ (*Riptortus pedestris*)、ホシハラビロヘリカメムシ (*Homoeocerus unipunctatus*)、ジウジナガカメムシと思われる幼生などを確認しています。またイラクサ科を食す外来種のラミーカミキリ (*Paraglenea fortunei*) も多く見られました。

フェモラータオオモモフトハムシは、大きい図体でその名の通り太い足をもっていますが、やはりハムシの仲間らしく危険を察知するといとも簡単に落下して逃亡を謀ります。また、光沢のある個体は小雨で背中水滴がつくとレンズ効果で綺麗ではありましたが(写真2)、個人的には好きになれない印象でした。

今年は、人間界ではコロナ禍で大変ですが、気象状況でも7月に台風の発生がなく、8月は猛暑で降水量も少ない状況となっています。我が家のクルミの木に毎年家族が嫌がるほど発生するシラガタロウ(クスサンの幼虫)は見られず、梅雨時に聞こえるフクロウの声も聞けず、アオバズクも鳴きません。人間界だけでなく生物たちの間でも何かが起きているような気がしてなりません。皆さんの周りはいかがでしょう？



写真1 フェモラータオオモモフトハムシ



写真2 水滴をまとったフェモラータオオモモフトハムシ

(う え だ と し ひ こ : 津市久居一色町176-1)

ようやく手にした三重県産ホソスジウズラタマキビ

中 野 環

この夏は、三重県でも気温が34℃以上の身の危険を感じる暑い日が続きました。2020年8月18日は特に暑い日でしたので、自宅にこもり、これまで溜めていた資料整理の作業をしていました。イシダタミ *Monodonta labio confuse* Tapparone-Canefri, 1874は、三重県の海岸では、高潮帯に普通にみられる巻貝ですが、気にかかることがありました。自然誌だよりに報告しようと思ったのですが、もう少し資料を集めてからと考え、夕刻になってから、志摩市浜島町から南伊勢町五ヶ所浦にかけて補足調査にでかけました。

調べたいという気持ちはあっても、どこにでもいるイシダタミだけを求めて暑さの残る海岸をひとりで歩くのは面白みが欠けるもので、普段なら絶対に実施しない調査です。南伊勢町田曾浦の大突堤（写真1）に到着した時には日没が近づいた時刻だったため、本日最後の採集地にすることにしました。ふと満潮線付近に目をやったところ、三重県では見かけないフォルムの貝が目に入りました。ホソスジウズラタマキビ *Littoraria (Littoraria) undulata* (Gray, 1839) です。ここにいたのか！三重県産の個体 Get！思わずシャッターをきりました（写真2）。もうイシダタミのことは眼中にはありません・・・



写真1. 南伊勢町田曾浦大突堤



写真2. 堤防に付着するホソスジウズラタマキビ（南伊勢町田曾浦）



写真3. 三重県産標本（中野環コレクション：TNC-Mo.20293）
殻高：12.98mm 殻幅：8.80mm

ホソスジウズラタマキビは、貝殻の高さ15mmほどの貝です（写真3）。和名から想像されるように、貝殻表面には規則的に細かい筋（螺溝）があります。日本近海産貝類図鑑（東海大学出版部）には、分布は、駿河湾と九州西岸以南、インドー西太平洋域。生息環境は、内湾の高潮帯、岩礁域と記されています。三重県では、松本幸雄先生が三重の貝類追加目録に二木島での記録を残しています。松本先生が記録した個体は、採集者や標本の所在は不明です。本種の分布の中心は九州以南です。三重県での生息確認は期待してなかっただけに嬉しく、暗くなるまで周囲を隈無く探しましたが、2個体目は発見できませんでした。田曾浦で成長した個体はわずかな上、本種が分布する潮位の高い場所でイシダタミを探していたからこそ見つけることができたのでしょう。イシダタミについては、もう少し資料を集めてから報告したいと思います。

（なかの たまき：度会町大野木1711-1）

事務局から

○要望書を提出

県に対して以下のような「質問・要望書」を提出し、8月24日に県農林水産部長名で回答がありましたので報告します。

令和2年7月29日

三重県知事 鈴木 英 敬 様

三重自然誌の会会長 武田 明 正

三重県指定希少野生動植物種「カワラハンミョウ(昆虫)」の保全に関する質問・要望書

平素より弊会へのご支援の数々に対して感謝申し上げます。

当会は、1989年に設立され、本県の生物多様性にかかる調査を行うことにより、定期的な会報・会誌の発行のほか、全国に先駆けての県版レッドデータブック（1995年）やみえ生物誌（2018年）を刊行してきました。また、会員の多くが三重県生物多様性アドバイザーの委嘱を受け、県実施の保全施策についての助言を適宜行っています。このような活動を通して、浅学・微力ながらも、本県における生物多様性の解明・保全の一端を担ってきたと自負しております。生物多様性の保全は大きな環境課題であり、そのなかで絶滅危惧種の保護は緊急の課題です。豊かな三重の生き物たちを、一種も欠くことなく、次世代の子ども達も野外で観察できるように残すことは県民の責務です。

そこで、県指定希少野生動植物種カワラハンミョウに関しての質問と要望を以下のとおりに行います。

1 質問

- ① 大淀海岸（明和町・伊勢市）の本種については、防潮堤工事後数年で絶滅したと聞いておりますが、事実でしょうか。
- ② ①が事実でしたら、工事時の本種保全対策の具体的な内容、および原状回復・本種保護のための措置命令の具体的な内容をご教示ください。
- ③ ②の保護措置についての現段階での結果と今後の計画についてお示しください。また、絶滅の原因が上述の工事以外でしたら、その原因及び対策をご教示下さい。

2 要望

白塚海岸で計画されている防潮堤工事について、保護の観点から以下の要望をします。

- ① 現堤防より海浜側への拡張は10m以内とし、海浜への工事車両等の進入は避けてください。
- ② 工事後は海浜に風が抜けなくなり、砂浜表面が安定するため外来植物等の繁茂が予測され、そのまま放置すると数年で本種が絶滅すると思われます。そこで、海浜の外来植物等の除草を定期的に継続する経費の予算化をしてください。
- ③ クロマツ等の植栽をされると周辺から草地在りが発達し生息地を狭める要因となりますので、工事後の緑化事業は絶対行わないようにお願いします。
- ④ 同海岸にはカワラハンミョウ以外にも、シロチドリ（県レッドデータブック；絶滅危惧IA類）やアカウミガメ（同；絶滅危惧II類）など様々な海浜性の希少生物が生息していますので、生物多様性保全について十分な対策をとるよう要望します。

なお、当会では、カワラハンミョウを始めとする白塚海岸の生物多様性保全のために協力させていただき用意があることを申し添えます。

【回 答】

（回答①）平成23年度から有識者にご指導いただきながら、カワラハンミョウの生息状況調査を実施してきており、平成30年度に工事が完了した後も、引き続き調査を実施しておりますが、平成31年度は生息を確認出来ていない状況です。

（回答②）三重県生物多様性保全検討委員会の協議結果を踏まえて、有識者と協議のうえ、工事箇所周辺における移植、工事を分割し複数年での実施、巣穴保護のための囲い柵の設置など保全対策を行いました。

(回答③) 平成23年度から生息状況調査を確認しておりますが、平成30年度までは生息を確認しておりますが、平成31年度は生息が確認できていません。

今後も引き続き有識者のご意見を伺いながら、関係部署で連携して大淀海岸におけるカワラハンミョウの保全に努めていきたいと考えています。



写真1 カワラハンミョウ，白塚海岸・
2002年8月24日撮影

県指定野生動物種とは、県版「種の保存法」とも称される「県自然環境保全条例」に基づいて指定されており、積極的な保全施策で守っていく種の位置づけとなっています。トキやコウノトリを飼育繁殖させて放鳥する行為は種の保存法に基づいています。カワラハンミョウも指定種ですので、このたび大淀海岸では残念ながらなくなりましたでは同条例の主旨に添いません。

回答によると、大淀海岸でも工事に際して保全対策はとられたようですが、結果的には有効でなかったわけですので、問題がどこにあったのか、工事以外の要因はないのか等、絶滅原因を明らかにすることが第一と思われまふ。原因が判明すれば、有効な対策も立てやすくなります。

幸いなことに、県生物多様性保全検討委員会の構成メンバー10人のうち8人、また、アドバイスを行っている有識者は大淀海岸も白塚海岸も本会会員です。しかし、残念なことに、これらの方々のあいだでカワラハンミョウの保全について意見交換が行われた形跡はありません。バラバラな対応では、情報共有・交換もままなりませんし、上述の方々のあいだで意見の相違が発生してしまう可能性すらあります。いちど集まって話し合うことも一案のように思います。

最後に、いづこかの国会答弁のように、質問に正面から答えない回答は今後控えて欲しいです。不明なことはわからない、不可能なこと(やりたくないことではありません)はできませんとしないと物事が前進しないのは経験則です。



写真2 大淀海岸，2007年12月23日撮影

○三県合同フィールドワーク実施

前号でお知らせした10月10-11日(土・日)のフィールドワーク鳥羽市答志島・菅島は実施します。体調に問題ない方は至急お申し込み下さい。

編集後記

夏は暑かったですねー。雨もまったく降らず、一昔前なら水不足で大騒ぎになるどころです。節水の技術と心がけが浸透してきているのでしょうか。それとも人口減のおかげでしょうか。いろいろなイベントが中止となり、こんな時こそ過去のデータをまとめるチャンスです。秋号は12月、会誌も年度内発行予定ですので、多くの投稿お待ちしております(善)。

自然誌だより125号 Mie Natural History Research Group News No.125

発行日 2020年9月16日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp